

植物園の過去の栄光と今後の課題

富山県中央植物園

園 長 黒 川 道

日常生活の中で気にとめることがなくても、身の回りにある植物や、生活を支えている植物の中に、自生のものではなく人為的に生活の中に組み入れられているものが沢山ある。それらの中には、民族の移動とともに伝えられたものもあるが、伝播や利用の過程で植物園が大きな役割を果たしたものもある。そうした植物のいくつかをとりあげてみると、植物園が過去において果たしてきた輝かしい歴史が浮き彫りになってくる。それと同時に、植物園がこれからの時代に担うべき役割も見えてくるように思われる。

1. 植物園の歴史

現存する植物園のうちで最も古いのは、イタリアのピサで1543年に創られた植物園で、これに次ぐのは、2年遅れて1545年に、パドア、フロレンス、ペロニャなど、イタリアの各都市に創設された植物園である。これらの植物園は薬用植物を紹介するための薬用植物園で、薬として使われる植物のサンプルを展示栽培し、一般の人々の参考に供するとともに、薬用植物を新しく発見するための調査、研究をしていたものと考えられる。日本でも、徳川幕府によって寛永15(1638)年に設けられた南御薬園(麻布、広尾)、北御薬園(大塚、護国寺)が植物園の始まりで、南御薬園を、貞享1(1684)年に小石川に移したものが、いろいろの変転を経て、現在の東京大学附属植物園(通称、小石川植物園)として残されているのである。

15世紀の大航海時代の始まりとともに、ヨーロッパ以外の地域への関心が高まり、それらの地域に産する植物にも興味向けられた。こうした地域の植物を研究するために、フランスのパリやオランダのライデン大学に植物園がつくられて、世界中から植物が集められ、植物園は単に薬用植物を集めたり、研究したりする場所ではなく、薬用

になるかならないかを問わず、広く植物を収集し、研究する機関として発展するに至った。それでも、多くの植物園は王侯、貴族の所有物であったから、花の綺麗なものを研究し、それらを庭園に植え、珍しさや華やかさを競うためのものであった。しかし、時代とともに植物園は植物そのものを研究する場所としての重要性を増し、植物学の黄金時代の主役として踊り出ることとなった。この時代はまたヨーロッパ各国の植民地全盛の時代でもあり、植物園は植民地政策を支える重要な役割を果たすことにもなった。

このような歴史を辿ってみると、私達の生活のなかで、あたりまえのように利用されている植物の中には、その導入の過程で植物園が重要な役割を果たしている植物がいくつもあることに気付く。その幾つかについて、さらに具体的に考えてみようと思う。

2. チューリップ

日本では新潟県や富山県がチューリップの名産地として知られている。これは園芸品種として栽培されているチューリップの産地であって、チューリップが新潟や富山で自生しているわけではない。チューリップの原産地はトルコを中心とする中近東であることは比較的良く知られている事である。中近東から導入されたチューリップの球根が、オランダのライデン大学附属植物園で花が咲いたのは1594年が最初といわれ、その美しさと珍しさから人気の的となり、17世紀の前半、1630年代になるとチューリップは一躍して投機の対象となり、いろんな野生種からさまざまな園芸品種が生み出されたのである。この時代に、チューリップの価格は急上昇し、球根一個を2頭立ての馬車や、4.8ヘクタールの土地と交換したというような話が伝えられている。19世紀の初頭にアメリカ

図1 チューリップの原種, 3種



で生産が始まるまでは、オランダが世界で唯一のチューリップの生産地であり、今日でも世界の中心的な生産地であり続ける伝統が作られ、オランダの経済的発展を支えてきたのである。

3. ゼラニウムと極楽鳥花

住まいの窓辺を飾っているゼラニウムの花は、いかにもヨーロッパらしい雰囲気をかもし出しているが、ゼラニウムはヨーロッパ原産の植物ではない。極楽鳥花は貴族を象徴するような高貴な華やかさを備えているが、これもヨーロッパの植物

図2 ゴクラクチョウカ



ではない。これらの植物を、アフリカからヨーロッパへ導入したのはマッソン (F. Masson 1741—1805) である。彼はイギリスのキュー植物園からアフリカへ送り込まれた植物探検家であった。1772—75年にかけて彼はアフリカの各地で植物を採集し、約50種のゼラニウムを含む、400種以上の植物をキュー植物園へ送ったのである。その後、ゼラニウムはヨーロッパ中の住まいやアパートの窓辺を飾るだけではなく、世界中で観賞用に栽培される品種を開発する原材料となったのである。切花や公共の空間を飾る豪華な花として人気のある極楽鳥花も、マッソンによってアフリカからヨーロッパに導入された植物である。この植物の花が、はじめてイギリスで咲いたとき、花の形が極楽鳥の頭部にそっくりで、色は極楽鳥に負けないほど鮮やかであったから、園芸家だけでなく一般の人の誰もがアッと驚いたといわれている。なお、この時代に植物園を経由して一般に親しまれるようになった園芸植物には、各種のエリカをはじめ、アロエやプロテアなどがある。

図3 アラビアコーヒーの実



4. ゴムとコーヒー

ブラジルのアマゾン川の河口部にマナウス (Manaus) という町がある。この町には南米とは思えないくらい豪華なオペラハウスがあることでも有名である。この町の繁栄は、アマゾン地域に特産のゴムの生産によって支えられて居たといわれている。19世紀後半に至るまで、ゴムはアマゾン地域の特産で、世界中のゴムの需要をこの地域だけで賄っていたので、ゴムの取引によってもたらされた財力がブラジルを支え、特にマナウスの繁栄をもたらした。その象徴がオペラハウスであるといわれている。ゴムの世界的な需要に目をつけたのが大英帝国である。ゴムの生産を保護するために、ブラジル政府は苗木や種子の国外への持ち出しを厳禁していたのに、イギリスから派遣された植物探検家が7万粒にも及ぶ種子を持ち出し、イギリスのキュー植物園へ送り出したのである。このときブラジル政府は軍艦を派遣して追跡したのであるが、ついに取り逃がしたといわれている。7万粒の種子は、キューの植物園で大事に育てられ、そのうち発芽したものは3000と伝えられている。これらの実生は大切にケースに入れられ、スリランカの植物園へ送られて試作されたがうまくいかず、さらにシンガポールの植物園へ送られて、マレー半島で試作して、ようやく栽培に成功したのである。19世紀後半から20世紀前半にかけて、ゴムの生産はますます重要性を増し、マレー半島で生産されるゴムは、世界の生産量の大部分を占め、その利益は大英帝国の繁栄を支える大きな原動力ともなったのである。また、ゴムの生産は現代の車社会を支える影の主演とも考えられる。太平洋戦

争の当初に、日本軍がまさきにマレー半島に進出したのも、軍事に必要なゴムを確保するためであったといわれている。

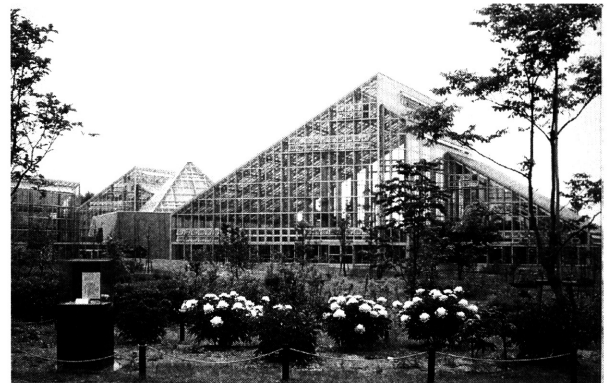
世界の熱帯圏で広く栽培されているコーヒーについても植物園が深くかかわっている。古くからアラブの各国で愛用されていたコーヒーを世界中に広めたのはヨーロッパの植物園である。コーヒーを産する植物としては、北アフリカ原産のアラビアコーヒーノキと、ロブスターコーヒーノキの2種が主なものである。オランダのライデン、およびアムステルダム植物園の仲介でオランダ領印度支那 (現在のインドネシア) のジャバ島に移されたロブスターコーヒーノキは、現在のロブスターとして、スマトラ島に導入されたアラビアコーヒーノキは、現在のマンデリンの生産に繋がっている。パリの植物園の仲介でジャマイカに伝えられたアラビアコーヒーノキは、とくに品質に優れており、今日ではブルーマウンティンとしてもはやされている。このようにしてコーヒーの飲用が普及し、それが更にコーヒーノキの栽培を広め、現在では世界中の熱帯でひろく栽培されるようになったのである。

5. 植物園のこれからの役割

18世紀末から19世紀にかけて発見された数々の植物は、人々の食生活を豊かにし、活発な経済活動を支え、商業の発展を促し、これらの植物から

図4 富山県中央植物園の景観

ボタン・シヤクヤク園から温室群を望む



作り出された園芸植物は生活に潤いを与えてきた。その裏には、植物園の地道な活躍と植物学の発展があった。この時代を植物学の黄金時代と呼ぶ人があり、植物園も歴史の表舞台で華やかな業績を残してきた。ところが、20世紀に入ると、植

図5 富山県中央植物園の景観
花盛りのソメイヨシノ



図6 富山県中央植物園の景観
低地草原区画の秋の七草



物園の存在は忘れられることが多くなってしまった。それでは、植物園の役割は終わったかといえ、そうではない。植物を収集し保存する事の意味は、ますます重要性を加えている。もちろん、研究面における役割分担は以前とは違い、例えば、園芸植物の開発については、園芸試験場があり、農作物の改良のためには農業試験場があって、それぞれ専門的な研究を進めている。しかし、いまだかつて利用されたことのない野生の植物を園芸植物や農作物として利用しようとする場合、その植物がどんな環境に生育し、どんな生理的な特性をもち、どんな遺伝的な特性を持つかなど、さまざまな情報が必要になってくる。こうした情報とともに生きた植物そのものを提供できるのは植物園をおいてない。したがって、植物園では出来るだけ多くの植物を生きた状態で保存し、必要に応じて提供できなければいけない。出来るだけ多くの植物ということになれば、開発によって絶滅が

危惧される植物も当然含まれることになる。絶滅を危惧される植物については緊急の保護対策が必要とされ、やむをえない場合には植物園で保護し、保存することの重要性が広く認められている。日本では絶滅危惧植物に対する植物園の対応の遅れが指摘されているが、その一つの対策として、地域の植物園がそれぞれの地域の植物相を持続的に調査し、そこから選び出された地域の絶滅危惧植物の保存に当たることが期待され、必要に応じて植物園相互の協力態勢を組むことが望まれる。佐渡のトキの悲劇を、植物で繰り返してはならないのである。

このような植物園の役割を果たすためには、多くの人々の理解と応援が必要である。したがって、植物園は多くの人々にとって楽しい場所である必要がある。植物を楽しむといえ、まず、花の美しさを楽しむことであろう。しかし、植物のさまざまな形の変化や、これが植物かと思うような変わった形の植物、夜だけしか花が咲かない植物などが楽しめるし、染物に利用されている植物、繊維を利用する植物、素晴らしい香りをもつ植物など、人間生活との繋がりを学ぶのも植物園である。したがって、植物園は美術館や博物館と並んで、社会教育機関あるいは生涯学習施設としての役割を合わせ持っているともいえる。植物園における植物観察会、講習会、講演会などは、こうした意味で楽しんでもらいたいものである。最近では、自分自身が参加できる催しが歓迎され、参加型のオリエンテーリング、親子でドングリで遊ぶ催しなどが、多くの植物園で企画され、喜ばれている。富山県中央植物園が、とくに力を入れているものとして植物画の普及がある。最初は講習会で手ほどきを受け、希望者は同好会に参加し、月一回自主的に植物園に集まって情報を交換するのであるが、月日を重ね、上達するにしたがって、植物画を描く楽しみがますます増大するようで、現在では会員が80名を越す盛況である。植物園には花を觀賞する楽しみだけでなく、いろんな楽しみ方が一杯あることを知って欲しいものである。